

中野の昔

くことが主で、特に中野―大葛間は、犀川の流れに添う形であつたので、所どころに洩が作られていて、容易に人を通してくれなかつた。特に難所といわれた所は、属にいわれる「サマ」と「ヨコブチ」であつた。

当時は今のような道路ではなく、中野から柄井沢に行くには、いやでも「サマ」の洩の上を通らなければならなかつた。古老の話によると、この洩の上には鎖が張られていて、それにしがみついて歩いたということである。

荷物を背負わない人、又は恐くない人は、その鎖を頼りに歩いたそうだが、荷物を背負つて歩く人は、太平山に登り柄井沢に下りるか、さもなければ靱内沢の「サブジャ」（寒沢）から柄井沢に山越えで歩くしか方法がなかつた。

「ヨコブチ」も然りで、柄井沢の神社から峯を登り「ヨコブチ」の上の方を横切つて小丹内沢の手前に下りる以外に歩く方法がなかつた。

現在のように道ができるきつかけになつたのは、明治の終り頃に八幡平の硫黄を扇田に運ぶために、軌道が敷設されたのがきつかけで、その後この軌道が大葛の重要な交通路となり、扇田営林署の木材運搬軌道に改良されて、その脇に道路が作られるようになって、老人も子供も歩いて柄井沢に行けるようになったと言われている。今では舗装道路が通り、時速六十キロで車が走るようになったが、百年前の交通を考えると、あまりの変化に驚くほどである。

昔、南部と秋田の戦争の時、秋田の軍勢が金山で敗退し、約四百人の大勢が中野を通過して、七日市方面に行つたという言い伝えがあるが、この大人数が何処を歩いたのか、大変興味があるところである。